

カントの歴史哲學(二)

米田庄太郎

一 緒 言

抑々カントは歴史哲學を如何に觀念し、又其の問題を如何に決定し、又其等の問題を研究する爲めに如何なる方法を用ひ、又其等の問題に就て如何なる解決を下して居つたかを考究して、之を余輩の社會學上より批判的に検査し、以て現代社會學の發達に對してカントは如何なる貢獻をなして居るかを考察せんとするのが本論文の目的である。

今日社會學上重要視さるゝ思想は、一般に近代科學的研究の結果として論述されて居る、又かゝる形態に於て之を論述するは、今日の社會學者の一般に用ひて居る方法である。併し其等の思想其物の多くは決して近代科學的研究によりて始めて到達されたるもの、或は樹立されたるものに非らずして、以前の時代の哲學者によりて既に説述されて居るものである。中には既に古代の哲學者によりて説述されて居

つたものも少なくない。されば一の科學としての社會學の概念其物は近代科學の發達の結果として始めて生れたるものであるが併し其の内容をなす思想の多くは既に前代に發達して今日の社會學に傳はれるものにして一般に社會學上の著作論文が讀者に印象を與ふる如く、今日の社會學者が近代科學的研究によりて始めて樹立したものでない。併し此の事は社會學者自身に於てもよく理解されて居らない場合が多い。一の科學としての社會學の概念は新しきものであるが爲めに社會學の内容其物も全く新しきものゝ如く考ふる人々は少なくない。今日見るが如き形態に於ては社會學は確かに現代の要求に應じて生れたる新しき科學である。併し何れの時代に於ても其の時代の要求に應ずる社會學は實質上存在し發達して居つたのである。實質上から考れば社會學は決して現代に於て突然生れ生でたる新科學に非らずして、人類が社會生活を批判的に考察する傾向を發達させた其時に淵源を發し、時代の要求に應じて夫れゝの形態をとつて發達し來れるものである。されば社會學は現代社會に於て始めて必要を認められたるものでなく、何れの時代に於ても必要缺く可からざるものであつた。而して現代社會學は長き深き歴史的根柢を有し現代社會の要求に應ずる新しき形態に於て發達せるものである。

現代社會學の實質的内容を直接に準備せるものは倫理學、法理學、政治哲學等であるが殊に歴史哲學は現代社會學の直接先行者として之れと最とも密接なる關係を有するものである。隨ふて吾人は現代社會學の先行者を研究し現代社會學が前代の社會學より發達せる徑路を究明せんとするに於ては、先づ歴史哲學に注目せねばならぬ。而して此の事は、現代社會學の概念を始めて明白に決定し、且つ只だ其の綱領を示すだけに止まらず、實質的にも之を建設せんと試み、更に社會學と云ふ新しき名稱をも創造せるコントの社會學なるものは、實質上に於ては一種の歴史哲學に外ならないと云はれて居るのを見ても明らかである。但しコントは社會學を社會靜學即ち社會秩序論と社會動學即ち社會進歩論とに大別して居るが、實際彼の社會學上の大著作は殆んど全く社會進歩論の研究より成立して居るのである。要するに吾人は現代社會學の直接の前身は歴史哲學であると見做すことも出来る。而して現代社會學は其の内容に於て歴史哲學より多くの思想を繼承して居るのである。されば吾人は現代社會學の内容をなす諸般の思想の歴史的深義を十分に理解する爲めには先づ歴史哲學を考究せねばならぬ。今日社會學上の原理とか法則とか見做さるゝものにして、歴史哲學より傳はれるものは、もと歴史哲學に於て如何なる意

義を有せしものであるか。又歴史哲學に於て如何に論證されて居つたものであるか。又現代社會學は其論證に於て歴史哲學以上に何物を加へて居るか。余は現代社會學上の重要思想の價值を歴史的に評定する爲めには、先づ此等の問題を論究することが肝要であると考へて居る。併し此等の問題を現代社會學の發現前の總ての歴史哲學者に就て研究するは容易な仕事ではない。又之を雜誌上の一論文に於て企だてることは殆んど不可能である。夫れで茲には一切の現代思想の淵源であるとも云はるゝカントの歴史哲學に就て特に此の研究を試みるに止めて置きたいと思ふ。

然るにカントの歴史哲學は近頃に至るまであまり詳しく研究の對象とはされて居らなかつた。余はカントの歴史哲學に就て始めて始めて其の一般的知識を得たのはフリントの最初の「歴史哲學の歴史」の著作「獨逸に於ける歴史哲學」本書の原書は千八百七十四年に出版されたと思ふが、余は嘗て之を見たことはない。而して余の閲讀したのは其の佛譯 *Élint, La philosophie de l'histoire en Allemagne* にして、京都帝國大學の圖書館にも原書はなく、右の佛譯が所藏されて居る。によりてあるが、其の後 Roehll, *Die philosophie der Geschichte, Darstellung und Kritik der Versuch zu einem Aufbau desselben*. 1878

によりて矢張極一般的な知識を得た。併し夫等の著作中に於てカントの歴史哲學に就て論述されて居る事は甚だ粗雑であつて、吾人は之れによりて只貧弱なる知識より得ることは出來ない。而して其の後更に Lamprecht, Herfer und Kant als Theoretiker der Geschichtswissenschaft (Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik 1897) によりて稍々まとまつた知識を得たが、是れも甚だ不満足なものであつた。要するに現世紀に入るまでにはカントの歴史哲學に就ては詳しき研究を企だてた人は誰もなかつたのである。而して余は其の事を始めてカントの歴史哲學を詳しく研究したフリッツ・メーデクス氏Dr. Fritz Medicusが千九百二年 Kantstudien に於て發表せる論文 *Fritz Medicus, Kants Philosophie der Geschichte* に於て學んだのであるが、同氏は右の論文の始めに「カントに歸れと云ふ叫聲が常に益々、又争はれ難き大なる効果を奏しつゝ高められて來た最近四十年間に、まだ大ケーニヒスベルガーの歴史哲學に就て深き探究を試みたる一の單篇物さへ現はれて居らないのは不思議に思はれる程である」と云はれ、且つ其の理由に就て少しく論述して居る。茲には其の理由に就て特に論述する必要もあるまいと思ふが、とにかく現世紀に入りてメーデクス氏の論文の現はるゝまでは、カントの歴史哲學に關する詳しき研究は行はれて居らなかつたのである。而して余自身も

是れまで自からカントの著作に就て直接彼の歴史哲學を研究したことはなく、メーダークロース氏の論文によりて始めて之を組織的に理解したのである。其後同氏の論文をたよりて直接カントの著作を涉獵し同氏の論ずる以上に多少得る處もあつたが、併し本論文中歴史哲學上の諸問題に關するカントの説として述ぶる處は主として同氏の研究より得たるものである。もつとも之れを現代社會學上から見て評價する處は全く余自身の意見であつて、何人にも負ふ處ないのである。

今カントの歴史哲學を考究して現代社會學上に於ける其の意義を究明し評價せんとするに當て、余は少しく歴史哲學と社會學との關係に就て論述して置きたいと思ふ。是れ先づ此の關係を決定して置くことは本論文の問題を研究する上に必要であると考へるからである。然るに社會學の概念も亦歴史哲學の概念も共に今尙ほ一定して居らないから、兩者の關係を明白に決定することが甚だ困難である。殊に輓近に至つて歴史哲學に關して新しき概念が發達して來て、其の社會學との關係を決定することは益々困難になつて居る。余はさきに歴史哲學は現代社會學の直接の前身であると云ふたが、夫れは舊歴史哲學の概念、社會學がまだ一の社會的科學として承認さるゝ以前の歴史哲學の概念に就て云ふたのであつて、今日の新しき歴

史哲學の概念に就て考ふれば、其の社會學との關係を簡單に右の如くに決定するとは出来ないのである。併し茲に此の問題を詳しく論述する暇はないから、只其の一般を論ずるだけに止める。

二、歴史哲學と社會學との關係に關する現今の諸見解

余は八九年前の京都帝國大學文科大學の社會學普通講義に於て特に社會學と歴史哲學との關係を論じたことがある。而して其の際先づ當時此の問題に關して學界に行はれて居つた諸見解を分類して、學生に示したが、茲にも矢張り先づ其の分類を擧げて此の問題を論究する端緒としたいと思ふ。

(1) 歴史哲學は社會の進化を考究するものにして、而して社會學の成立したる上は全く其の中に吸収され獨立の學問たる資格を失なふものであると見る見解。此の見解は一時社會學者の間に汎く行はれたるものである。(Serrano, *La Sociologia italiana*, 1884. Gumplovicz, *Sociologie und politik*, 1892. Giddings, *Principles of Sociology*, 1896. 等參考)。尙ほ歴史哲學の社會學に對する關係を練金術の化學、星占術の天文學に對する關係に比する人々々々へあつた。(Stellani, *Socialismo, Darwinismo e Sociologia*, 1885. Fouil

ie, *La Science Sociale Contemporaine*, 1883 等参考)。ヴァンニは歴史哲學を錬金術や星占術に比するは之れ甚だ不謹慎な無禮な又不正な見解であるとして、此の見解を大に非難し、歴史哲學が社會學の發達に及ぼせる影響社會學者が歴史哲學を學ぶことによりて受くる利益、歴史哲學の原理の社會學によりて益々確立されたること、社會學が歴史哲學より重要な或原理を繼承せること等をあげて詳しく論じて居る。併し今日社會學に對して歴史哲學は一の學問として如何に構成せらる可きかを論じて居らない。彼もつまりは歴史哲學は社會學の中に吸収されるものと見たのであるまいか。Vanni, *Prime Linee di un programma critico di Sociologia*, 1888.

(2) 歴史哲學は社會學と同じく社會生活を對象とするものであるが併し其の着眼點に於て之れと異なるものと見る見解、

ヴァントは社會學は人類社會の狀態コンディションを研究するものであるが、之れに對して歴史哲學は其等の狀態を生起變動せしむる過程プロセスを研究するものであると云ふて居るが、社會學中にも南米のコルモの如きは矢張り同じ見解をとつて歴史哲學は獨立なる學問であると論じて居る。Wundt, *Logik*, II, 2, Colmo, *principes Sociologicos*, 1905.

(3) 歴史哲學は其の方法及び目的に於て本來社會學とは異なる獨立なる學問で

あると見る見解、

シュタインの説は此の見解の代表者と見做し得られると思ふが、彼の考ふる處によれば先づ歴史哲學は主として演繹的構成法を用ひ、社會學は歸納的方法を用ゆるに於て兩者は異なり、次に歴史哲學は世界の究極原理と普通的法則とを考究するを目的とするが、社會學は本來記述的なる學問にして、社會的事實を其の最とも包括的な基礎に於て整理し、其の中に一定の律動リットム及び類型タイプを發見せんとするものであるに於て、又兩者は異なつて居る。Ludwig Stein, *Die Soziale Frage im Lichte der Philosophie*, 1896. Schlegel, *Die Philosophie der Geschichte*. Cosentino, *La Sociologia di Vico*, 1898.

(4) 歴史哲學は社會學の上に位して社會學の結果を總括する學問であると見る見解。

此の見解は露國のラッポポルトの説によりて最ともよく代表されて居ると思ふが、彼の論ずる處によれば、夫れ社會は人類の發達の必要條件であるが、併し其の唯一の條件ではない、而して又社會進化は歴史的進化とは全然同一なるものでない。吾人は社會の外に個人があることを認めねばならぬ。而して社會と個人との相互的作用或は影響の下に於て人類は發達するのであるが、然るに社會學は靜學的及び動學

的見地より只社會の形態だけを研究する學問にして、人類發達の全體を對象とするものでない。而して之を對象として研究するものは即ち歴史哲學である。要するに社會學は人類發達の社會の方面だけを研究するものであるが、歴史哲學は社會と個人とが、相互的作用或は影響の下に於て進動し行く其の進化の全體を研究するものである。されば歴史哲學は社會學の上に位し、其の結果を總括する一層高大なる學問であるのである。 Rappoport, Zur Charakteristik der Methode und Hauptrichtungen der Philosophie der Geschichte, 1896, La Philosophie de l'histoire comme Science de l'Evolution, 1903.

(5) 其の根本思想に於ては大體上(4)の見解と一致して居るが、併し社會學を以て只人類進化の社會の方面だけを研究するものと見做さず、其の全體に於て之を研究するものと見做し、隨ふて社會學と歴史哲學とは實質的には同一の學問であると觀念し、而して實質上社會學は此の如きものである以上は、只社會の方面だけを研究するものゝ如き誤解を起し易き社會學と云ふ語を避けて、歴史哲學と云ふ語を用ひんとする見解。

此の見解はバールトの説によりて最もよく代表されて居るが、彼の考ふる處によれば人間類型と社會類型とは相離す可からざる關係を以て相互に結合するもの

にして、一より離して他を理解することは不可能である。吾人は人間類型より切り離して社會類型を理解することが出来なければ、又社會類型より切り離して人間類型を理解することも出来ない。要するに人類の運命を理解する爲めの學問は只一つあるのみである。之を社會學と稱してもよければ亦歴史哲學と稱してもよい。夫れば只名稱上の差異だけで實質は常に同じものである。併し吾人は社會學と云ふ語よりも寧ろ歴史哲學と云ふ語を選びたいと思ふ。其の主要なる理由は二つある。一は社會學と云ふ語は人類進化の一方面即ち社會の方面を偏重して、他の方面即ち人間類型の方面を看過し又は輕視するものゝ如き感を世人に與ふる危険あることである。二は歴史哲學と云ふ語は社會學と云ふ語よりも古き歴史の權利を有することである。Barth, *Die Philosophie der Geschichte als Soziologie*, 1895.

(6) 歴史哲學は認識論的學問にして、社會學の如き實質的學問でなく、隨ふて兩者は本來學問的性質を異にする夫れぞれ獨立の學問であると見る見解、

〔此の見解は歴史哲學の最新概念の一を發揮するものにして、要するに實質的なる自然科学に對して、吾人は如何なる途をとり、如何なる方法を用ひ、又如何程まで自然科学的眞理の發見に達し得るかと云ふが如き認識論的問題を研究する一學問を建

設し、これを自然哲學と稱せんとする一派の方針に準じて、歴史に關する認識論的諸問題、即ち吾人は如何なる途をとり、如何なる方法を用ひ、又如何程まで歴史の真相を理解し得るかを研究する學問を建設し、之を實質的なる歴史學的科學に對して、歴史哲學と云はんとするものである。而して余は大體上より見て此の見解を代表するものとして左の諸家を舉げて置く。但し詳細の點に於ては其等諸家の見解は種々異なつて居るので、只大體上の方針に於て一致して居るだけである。 Droysen, Grundriss der Historik (3. Aufl.) 1882. Labriola, I problemi della filosofia della Storia, 1887. Simmel, Die Probleme der Geschichtsphilosophie, 1892. Bernheim, Lehrbuch der Historischen Methoden, (2. Aufl.), 1894. Croce, Il concetto della storia nelle sue relazioni col concetto dell' arte, 1896. Rayn, La classificazione delle scienze e le discipline sociali, 1904.

(7) 歴史哲學を以て價値の學問と見る見解

是れ亦歴史哲學の新概念の一にして、單純に此の見解を代表するものとしては余はオイケンの歴史哲學の概念を舉げて置きたいと思ふ。 Brucken, Philosophie der Geschichte (Die Kultur der Gegenwart, Teil I, Abtheilung VII) 1907. 併し或意味に於ては(6)の見解を包括する複雑な又完成せる此見解の適例としてリッカートの説を簡單に述べて置く。

リックカートは歴史哲學を三つの問題部類に於て組織して居る。第一問題部類は歴史論理ヒストロギヤ或は哲學的方法論の諸問題を、包括するものである。彼は先づ歴史の知識の目的は何であるかと云ふ問題を起し、之れに答へて歴史の知識は特殊ベジゲンテ的及び特有アイゲンテのもの、一度ユニムラツヒ的發達を叙述すべきものであると論じて居る。彼の考ふる處によれば此の發達は其の現實に於ては一度ユニムラツヒ的にして繰り返し得可からざるものである。是れ全く歴史的世界の概念と結合する人類全體メンシニハイゲンツエに關するものであるからである。而して歴史家は單一にして一度ユニムラツヒ的なる人類及び其の展開エントフタルンツ并に調節グライテルンツのみを取扱ふ可きものにして、彼の任務は此の發達エントフタルンツ進行を其の總ての部分に於て多種多様であつて、而も一の完成せる個性を形成するがまゝに叙述することであらねばならぬ。然らば此の全體の理解に達する途は何であるかと云ふに、是れ即ち歴史的理解構成ヒストリクシニエベリクフスベルンツである。自然科学的理解構成と嚴格に區別される歴史的理解構成のみが獨り右の全體の理解に吾人を導くことが出来るのである。歴史的理解は個性的及び特殊のものに關して構成せられ、之れに反して自然科学的理解は普遍的のものに關して構成せらる。歴史は現實なるもの、全體を捕へんとし、自然科学は普遍的法則に達せんと努力する。歴史は人類の全體が如何に展開し進歩するか、如何なる秩序及び關係

に於て調節せらるゝか、又精神的生活は如何にして其の特殊なる容貌形態を得るかを知らんと欲し、自然科学は如何なる普遍的法則が現實界の最少部分をも動かすかを決定せんとする。歴史は特殊なもの^を評價して之を歴史的全體に結び付け、自然科学は個別的なるものを價值無關係なるものゝ一例として一の普遍的なるものの中に取り込まんとする。自然科学に對しては只普遍的なもの、只特殊なもの^の多數に共同的なるものゝみが重要であり、意味があるのである。要するに歴史的理解は個性の理解であつて、一度的にして繰り返し得ざるものを捕へんとするのである。次に吾人の反省は歴史の現實の全範圍を制約する理解形式^{ハイクリッファオルメン}の考察に移る。

歴史的世界を特殊的個別的に理解せしむる其等の形式は何であるか、夫れは自然科学的理解構成の形式と如何に區別せらるゝか、一切の經驗科學に於て妥當なる因果の觀念は歴史的認識に於ては如何なる特別なる容貌をとるか。吾人の反省は更に歴史的理解構成の形式より歴史的事象^{ヒストリッシェ、ゲイシェヘン}の原理の考察に移り、而して文化價值に於て歴史的實在の最高條件を認める。歴史的生活の理解に對して決定的に重要なるは法則に非らずして、藝術及び宗教、學問及び國家等の如き價值概念である。つまり哲學的考察の特殊的對象をなし、哲學によりて説明せられて始めて始めて、其の特徵を十分に

發揮する其等の價值概念である。夫れよりして歴史と哲學との間に親密なる結合が生じ、而して其の結合は只一の歴史的世界觀に於てのみ明らかに發揮され得るのである。今其等の文化價值は先づ歴史的事象の選擇原理である。歴史的事象の總てが歴史的な理解構成の中に入るのではなく、其の多くは歴史的に意義なきものとして放棄されるのである。個人格も亦其の經驗生活の全體に於て歴史的實在の中に攝取されるのではなく、只創造及び成業の大事業を大なり小なり闡明する方面に於てのみ其の中に攝取されるのである。文化價值は又調整原理である。文化價值は歴史的世界を調節し、大なる發達系列を構成する、而して一切の歴史的考察は之れに結び付くのである。終りに文化價值は認識手段として觀念されることが出来る。文化價值の特性并に其の間に成立する關係の理解は世界史 *Universalgeschichte* の形に於て世界的事象の解釋を可能ならしむるのである。Rieker, *Geschichtsphilosophie in der* Kuno Fischer Festschrift, 1905.

却説歴史哲學の概念及び之れと社會學との關係に關する諸説の右の分類は余が八九年前に京都帝國大學の圖書館及び研究室の藏書を涉獵して立てたるものであるが、其の後余は特に此問題に注意する暇なかりしを以て、必要な場合には矢張り

右の分類を其儘に用ひて居つたのである。而して本論文を準備するに當て余は歴史哲學に關する最近の大著作 Mellis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie, 1915, を参考したが別に右の分類を修正する必要はないと考へるのである。同氏が右の著作中に擧げて居る諸種の歴史哲學概念は余の分類の何れかの部類に入れることが出来る。又同氏自身の歴史哲學概念は同氏自から言明して居る如く、リッカートの概念に基づき而して之を大成せんとするものである。されば同氏の新概念も大體上矢張り第七種の見解に屬するものである。併し同氏の右の著作は高價なもので、且つ今日ではまだ容易に手に入れることは出来ないから、讀者の便宜を圖り茲に同氏の歴史哲學の概念の大要を述べて、以て歴史哲學の新概念の最近の發達を示して置きたいと思ふ。

メーリス氏は歴史哲學を如何なる學問として組織せんとするかは茲に右の著作第一部第二篇「歴史哲學的個別問題」の綱目を擧ぐれば最もよく理解し得られると思ふ。同氏は先づ歴史哲學の問題を歴史論理グンシヒトローギクの問題と、歴史的價值論の問題と世界史の問題との三大部門に分つて居る。而して夫より又各部門に屬する諸問題を分類して其の一般的意義を論述して居るが、先づ歴史論理の部門に於ては、第一問題

圈として歴史の目的の問題、第二問題圈プロブレムクワイスとして歴史的事物の問題、第三問題圈として歴史に於ける形式と内容との問題、第四問題圈として方法の問題を挙げ、更に各問題圈に屬する諸問題を詳しく列擧して居る。次に歴史的價值論の部門に於ては第一問題圈として妥當グルトツングの問題、第二問題圈として文化價值の作業問題ライズツンクツプロブレム、第三問題圈として文化價值の構造問題シュネテラフクツングプロブレムを挙げ更に各問題圈に就て夫れに屬する諸問題を決定して居る。終りに世界史の部門に於ては先づ其の一般的問題と特殊の問題とを分ち、尙ほ特殊の問題を更に世界史の第一問題として價值と時間と關係と、第二問題として歴史的現象の可能的意義デイ、マイグリーツツ、シツケツング給附とに分ち、又後者の問題を大體上左の如くに決定して居る。即ち宗教的意義給附、科學的意義給附、哲學的理論的意義給附、倫理的意義給附、審美的意義給附、包括的統一的意義給附等の諸問題。

今歴史哲學に關する現今の諸概念及び歴史哲學と社會學との關係に關する諸見解は大體上右に述べしが如き物であるが、然らば余の社會學の概念の上から考察して、余は社會學と歴史哲學との關係并に歴史哲學の概念を如何に決定せんとするかと云ふに、本節は餘りに長くなつたから節を別にして之を論述したいと思ふ。(未完)